

藤村全集

第十卷

筑摩書房版

藤村全集第十卷

昭和四十二年八月十日發行

著者 島崎 藤村

發行者 竹之内 靜雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
株式會社 筑摩書房
電話・東京（一）七六五一（代表）
振替口座 東京四一一二三番

第十卷 目次

嵐

..... 一

嵐

..... 三

伸び支度

..... 五

ある女の生涯

..... 三

三人

..... 一七

明日

..... 二五

貧しい理學士

..... 一三

子に送る手紙

..... 一九

熱海土産

..... 二七

食堂

..... 二七

嵐の後に……………二九〇

涙……………二九一

分配……………三〇一

山陰土産……………三七七

一 大阪より城崎へ……………三九

二 城崎附近……………三六

三 大乘寺を訪ふ……………四〇

四 山陰道の夏……………四四

五 浦富海岸……………四七

六 鳥取の二日……………五一

七 三朝温泉……………五五

八 松江まで……………五九

九 境港と美保の關……………六五

一〇 出雲浦海岸……………六九

二 宍道湖の旅情……………七五

三	菅田庵を訪ふ	三六八
三	杵築より石見益田まで	三六〇
四	雪舟の遺蹟	三六三
五	高角山	三六九
六	津和野まで	三九三

力 餅

三九七

はしがき	三九
------	----

第一章 十の話

四〇一

一	時計の言草	四〇三
二	蛙の聲	四〇三
三	栗の子供	四〇五
四	蟬の送別會	四〇六
五	牛の先達	四〇八
六	羊飼の話	四二
七	案山子	四二四
八	たんぼ	四二五

九 桃と菖蒲の節句……………四二五

一〇 お寺の小僧さん……………四二七

第二章 母を思ふ……………四二九

一 母を思ふ……………四三〇

二 蕪を漬ける家……………四三二

三 古い池……………四三二

四 鹽のお握飯……………四三三

五 芋焼餅……………四三三

六 髮結の親子……………四三四

七 不似合なもの……………四三五

八 生ると申すか、生らぬと申すか……………四三六

九 惠那山の麓……………四三六

一〇 里言葉……………四三七

一一 白い狗の話……………四三八

一二 母の上京……………四三九

第三章 二つの雷さまその他……………四四二

一 二つの雷さま……………四四二

二 この世の旅のはじめに……………四四四

三 近江の刀鍛冶……………四三五

四 吳くみ子さん……………四三九

五 栗本先生……………四四〇

六 古着屋の亭主……………四四三

第四章 教師はお友達の中にも……………四四五

一 教師はお友達の中にも……………四四六

二 サクソニイの梅……………四四六

三 若いお友達の死……………四四七

四 帚 木……………四四八

五 心を入れ替へに……………四四八

六 上總行の船が出る頃……………四四九

七 鹿野山を越えて……………四五〇

八 小湊へ……………四五一

九 玄關番……………四五三

一〇 『小公子』の譯者……………四五四

第五章 宮城野……………四五七

一 宮城野……………四五八

二 松 島……………四五九

三	母を葬りに	四六〇
四	両親の墓	四六一
五	檜鳥の挨拶	四六二
六	歸郷の日	四六三
七	仙臺の宿	四六五
八	荒濱	四六五
九	耳の好い人	四六六
一〇	木像拜見	四六八
一一	松風	四六九
一二	長いもの	四六九
一三	鯛と鮭	四七〇
一四	朝	四七一

第六章 姉

一	姉	四七三
二	姉の家	四七四
三	栗めしの好きな橋翁さま	四七六
四	馬市の立つ町	四七七
五	行商	四七八

六	古い茶碗	四七九
七	秋を迎へて	四八〇
八	夕顔より千瓢へ	四八一
九	涼しさうなもの	四八二
一〇	木曾の蠅	四八二
第七章 浅間の麓		
一	浅間の麓	四八五
二	チヨン髻	四八六
三	土と水	四八八
四	地大根	四八九
五	山の上へ来る冬	四九〇
六	若布賣	四九一
七	わらびと竹の子	四九二
八	佐久言葉	四九三
九	桃	四九四
一〇	蛙の見學	四九五
一一	書物は野にも河原にも	四九六

第八章 十二の話……………五〇一

一 讀書の聲……………五〇二

二 齋藤さんの羽織の紐……………五〇二

三 手製の玩具……………五〇三

四 小山喜代野さんの碑銘……………五〇四

五 子供のお友達の一……………五〇五

六 子供のお友達の二……………五〇六

七 子供のお友達の三……………五〇六

八 海の神……………五〇七

九 たけくらべの里……………五〇九

一〇 新しい建築の話……………五一〇

一一 二人の旅人の問答……………五一二

一二 はづき……………五二三

『力餅』の後に……………五二五

解題……………五二九

校異……………五三七

嵐

この書は大正九年より同十五年に亙り
飯倉にありての著者の創作九篇を集む

嵐

子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集まつて、そこにある柱の側へ各自の背丈^{せたい}を比べに行つた。次郎の背の高くなつたのにも驚く。家中で、一番高い。あの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで届きさうに見える。毎年の暮に、郷里の方から年取りに上京して、その時だけ私達と一緒にゐる太郎よりも、次郎の方が背はずつと高くなつた。

茶の間の柱の側は狭い廊下づたひに、玄關や臺所への通ひ口になつてゐて、そこへ身長を計りに行くものは一人づゝその柱を背にして立たせられた。そんなに背延びしては狡^こいと言ひ出すものがあり、もつと頭を平にしてなどと言ふものがあつて、家中のものがみんなで大騒ぎしながら、誰が何分延びたといふしるしを鉛筆で柱の上に記しつけて置いた。誰の戯れから始まつたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ／＼には頭文字だけを羅馬字^{ローマ字}であらはして置くやうな、そんないたづらもしてある。

『誰だい、この線は。』

嵐
と聞いて見ると、末子^{すえこ}のがあり、下女のお徳のがある。いつぞや遠く満洲の果から家をあげて歸國した親戚の女の兒の背丈までもそこに残つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子の背は太郎と二寸ほどしか違はない。その末子

が最早九文の足袋をはいた。

四人ある私の子供の中で、身長身長の發育にかけては三郎が一番おくれた。一頃の三郎は妹の末子よりも低かつた。日頃、次郎びいき最良の下女は、何かにつけて『次郎ちゃん、次郎ちゃん』で、そんな背の低いことでも三郎をからかふと、その度に三郎は口惜くやしがつて、

『悲觀悲観しまふなあ——背はもうあきらめた。』

とよく嘆息した。その三郎がめき／＼と延びて來た時は、いつの間にか妹を追ひ越してしまつたばかりでなく、兄の太郎よりも高くなつた。三郎はうれしさのあまり、手を振つて茶の間の柱の側を歩き廻つたくらゐだ。さういふ私が同じ場所に行つて立つて見ると、殆んど太郎と同じほどの高さだ。私は春先の筍のやうな勢ひでずん／＼成長して來た次郎や、三郎や、それから末子をよく見て、時にはこれが自分の子供かと心に驚くことさへもある。

私達親子のものは、遠からず今の住居すまひを見捨てようとしてゐる時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めいめい一部屋づゝを要求するほど一人前に近い心持を抱くやうになつて見ると、何かにつけて今の住居は狭苦しかつた。私は二階の二部屋を次郎と三郎にあてがひ（この兄弟は二人ともある洋畫研究所の研究生であつたから、）末子は階下にある茶の間の片隅で我慢させ、自分は玄關側ぐわんがわの四疊半に籠つて、そこを書齋とも應接間とも寢部屋ともして來た。今一部屋もあつたらと、私達は言ひ暮して來た。それに、二階は明るいやうでも西日が強く照りつけて、夏なぞは耐へがたい。南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで、雨でも來る日には茶の間の障子は殊に暗かつた。

『この家には飽きちやつた。』

と言ひ出すのは三郎だ。

『父さん、僕と三ちゃんと二人で行つて探して來るよ。好い家があつたら、父さんは見においで。』

次郎は次郎でこんな風に引受け顔に言つて、畫作の暇さへあれば一人でも借家を探しに出掛けた。

今更のやうに、私は住み慣れた家の周囲を見廻した。こゝは一番近いポストへちよつと葉書を入れるに行くにも二町はある。煙草屋へ二町、湯屋へ三町、行きつけの床屋へも五六町はあつて、どこへ用達に出掛けるにも坂を上つたり下つたりしなければならぬ。慣れて見れば、よくそれでも不便とも思はずに暮して來たやうなものだ。離れて行かうとするに惜しいほどの周囲でもなかつた。

實に些細なことから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には、何かしら自分でも動かずにゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。そんな氣持から、兎角心も落ちつかなかつた。

ある日も私は次郎と連立つて、麻布^{かうがいちや}斧町から高樹町あたりをさんぐ探し廻つた揚句、住み心地の好きさうな借家も見當らず仕舞ひに、空しく植木坂の方へ歸つて行つた。いつでもあの坂の上に近いところへ出ると、そこに自分等の家路が見えて來る。誰かしら見知つた顔にも逢ふ。暮から道路工事の始まつてゐた電車通りも石やアスファルトにすっかり敷きかへられて、橡^{とち}の並木のすがたも何となく見直す時だ。私は次郎と二人でその新しい歩道を踏んで、鮎屋の店の前あたりからある病院のトタン塀に添うて歩いて行つた。植木坂は勾配の急な、狭い坂だ。その坂の降り口に見える古い病院の窓、そこにある煉瓦塀、そこにある蔦^{つた}の蔓、すべて身にしみるやうに思はれて來た。

下女のお徳は家の方に私達を待つてゐた。私達が坂の下の方の石段を降りるのを聲^{こゑ}で聞き知るほど、最早三年近くもお徳は私の家に奉公してゐた。主婦といふもののない私の家では、子供等の着物の世話まで下女に任せてある。このお徳は臺所の方から肥つた笑顔を見せて、半分子供等の友達のやうな、慣れ／＼しい口をきいた。

『次郎ちゃん、好い家があつて？』

『駄目。』

次郎はがっかりしたやうに答へて、玄關の壁の上へ鳥打帽をかけた。私も冬の外套を脱いで置いて、借家探しに草臥れた眼を自分の部屋の障子の外に移した。僅かばかりの庭も霜枯れて見えるほど、まだ春も淺かつた。

私が早く自分の配偶者を失ひ、六歳を頭に四人の幼いものをひかへるやうになつた時から、既にこんな生活は始まつたのである。私はいろ／＼な人の手に子供等を託して見、いろ／＼な場所にも置いて見たが、結局父としての自分が進んで面倒を見るより外に、母親のない子供等をどうすることも出来ないのを見出した。不自由な男の手一つでも、どうか吾が兒の養へないことはあるまい、その決心に到つたのは私が遠い外國の旅から自分の子供の側に歸つて來た時であつた。その頃の太郎は漸く小學の課程を終りかける程で、次郎はまだ腕白盛りの少年であつた。私は愛宕下のある宿屋にゐた。二部屋あるその宿屋の離れ座敷を借り切つて、太郎と次郎の二人だけをそこから學校へ通はせた。食事の度には宿の女中がチャブ臺などを提げながら、母屋の臺所の方から長い廊下づたひに、私達の部屋まで支度をしに來て呉れた。そこは地方から上京する馴染の客をおもに相手としてゐるやうな家で、入れ替り立ち替り滞在する客も多い中に、子供を連れながら宿屋住居する私のやうなものもめづらしいと言はれた。外國の旅の経験から、私も簡單な下宿生活に慣れて來た。それを私は愛宕下の宿屋に應用したのだ。自分の身のまはりのことは成るべく人手を借りずに。そればかりでなく、子供にあてがふ菓子も自分で町へ買ひに出たし、子供の着物も自分で疊んだ。

この私達には、いつの間にか、いろ／＼な隠し言葉も出來た。

『あゝ、また太郎さんが泣いちゃつた。』

私はよくそれを言つた。少年の時分には有りがちなことながら、兎角兄の方は『泣き』易かつたから、夜中に一